

E1 [第5提言] 「動詞活用の歴史的単純化」に「動詞の態拡張」を見ること

E1 5.1 動詞の態拡張

日本語は、原動詞に態詞を付加して、動詞を増やしてきた。

このことを動詞の態拡張という。

たとえば、「分く wak-」という原動詞は態詞を取り込んで新しい動詞を作った。

わく(分く) wak- → wak;e- 分ける
 wak;ar- 分かる
 wak;ar;e- 別れる

この例のように、原動詞に -e-, -ar-, -as- などの態詞が付加され、その態詞が語幹化して新しい動詞が誕生した。動詞化した態詞は、「;」で示すことにしている。

wak-e- → wak;e-

実に多くの原動詞がこの態拡張をしたが、それは 12 の方式に分類できる。(『日本語態構造の研究 -日本語構造伝達文法・B-』や『日本語のしくみ(4)』参照。)

いま例として、12 方式中の第2方式にある「開く ak-」という動詞を取り上げてみる。この動詞は次の図のように、態拡張して現代語の「開ける ak;e-」を生んだ。

表E1-15 原動詞 ak- が態拡張して ak;e- へ (V3.2 Z2 の表)

原自動詞		ak- (開く)					
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
推定	前文献時1	ak-i	ak-u	ak-u	ak-ë	ak-i=a	
	前文献時2	ak-ay-i				ak-ay-i=a	
	前文献時3	ak;ë-Ø	ak;Ø-u	ak;ur-u	ak;ur-e	ak;ë-yö	
	前文献時4						
以下、文献記録時代							
3語幹	奈良時代	ak;ë-Ø	ak;Ø-u	ak;ur-u	ak;ur-e	ak;ë-yö ak;e-yo	下二段活用
	平安時代	ak;e-Ø					
	鎌倉時代						
2語幹	室町時代		ak;ur-u				
	江戸・前期						
1語幹	江戸・後期					ak;e-ro	
	現代	ak;e-Ø	ak;e-ru	ak;e-ru	(なし)		

奈良時代には、ak;e-, ak;Ø-, ak;ur- という3形末動詞になっていた。

鎌倉時代には、ak;e-, (ak;Ø- → ak;ur- の2形末動詞になった。

江戸時代後期に今日の ak;e- (← ak;ur-) の1形末動詞になった。

現象面だけで見ると、いわゆる下二段活用が下一段活用に変わったことになる。国語学は、これを「活用形式を整理したもの」とした。つまり、活用表の中の「く」という要素を、単純に「け」に「統合した」ものとした。(下の国語文法の活用表にある「未然形」の存在は、理論的には認められないので、前ページの表には欄がない。)

表E I-16 国語文法の活用表 (いわゆる下二段活用が下一段活用に変わる)

		動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
奈良	下二段活用	あく	あ	け(乙)	け(乙)	く	くる	くれ	け(乙) <small>「よ」を付けた破し</small>
現代	下一段活用	あける	あ	け	け	ける	ける	けれ	ける、けよ

確かに、現象面だけで見れば、活用形式の整理である(下表、二重線の左側)。

表E I-17 「活用の整理」と、その実質 (コラムV2 の表より)

	活用の整理 (国語文法)		その実質は動詞の態拡張		
	元の活用	現代語の活用	語例(現代語)	方式	参照
①	下二段活用	→ 下一段活用	開ける ak;e-	方式[2]	
②	上二段活用	→ 上一段活用	起きる ok;i-	方式[3]	
③	上一段活用	→ 上一段活用	見る mi-	方式[1]	
④	四段活用	↘	読む yom-	方式[1]	
⑤	ラ変活用	↘	ある ar-	方式[1]	Vp.87
⑥	ナ変活用	↘	死ぬ sin-	方式[3]	Vp.86
⑦	下一段活用	↘	蹴る ke;r-	方式[1]	
⑧	カ変活用	→ カ変活用	来る k;ur-	方式[3]	Vp.85
⑨	サ変活用	→ サ変活用	する s;ur-	方式[3]	Vp.84

表から読みとれることは以下のとおり。

- ・いわゆる「上二段活用」「下二段活用」がなくなったこと
- ・いわゆる「四段活用」「ラ変活用」「ナ変活用」および「(蹴る)の下一段活用」が「五段活用」に一本化されたこと

つまり、「活用形式が整理されて少なくなった」。……国語文法の捉え方は、日本語話者が歴史を通じて活用を整理して、日本語を合理化したということなのである。確かに、現象面だけを見れば、そう言うことはできる。これは「係り結び」考察にも関係する。

しかし、その現象はなぜ生じたのか、その実質は何であったのか、を考えねばならないのではないかと。…実質は動詞の態拡張なのである(上表、二重線の右側)。これについては『日本語のしくみ (4)』のV3章で詳しく述べた。また、『日本語態構造の研究 - 日本語構造伝達文法・B-』で、より詳しく研究している。

5.2 「活用の整理」は目的ではなく、「動詞の態拡張」の結果である

ある研究では、活用形を少なくすることが目的で、それにより「活用の整理」がもたらされたとする。それは違う。「活用の整理」は「動詞の態拡張」がもたらした結果なのである。